

元学生の輔けを借りて

S T 養成校の集中講義の一コマを、大学院後期（博士）課程の院生にお願いした。彼は、学部生の時から足かけ5年私の元で子どもとの係わりを続け、今年、後期課程に進学後も係わりを続けている。

私の講義は、脱線、横道に逸れるのが常であるだけに、コミュニケーション（交信）行動の形成を学問的・体系的に学生に説明してくれることを、彼に期待した訳である。

彼は、私の日頃の講義の足らざる側面を補う講義をしてくれた。また、交信行動形成が、単に指導場面を設定して行うことでなく、子どもの日常生活のあらゆる活動の場面に、その係わり合う（指導）場面があることを、事例のビデオを通して、学生に再確認させてくれた。何よりも、私が学生に脱線しながらも学生に語り続けている、指導とは係わり手の姿勢、観点、工夫等が重要な要因であり、対象者との「やりとり（係わり合い）」の中でこそ、交信行動が形成されることを、学生に再認識させてくれた。

彼にとってもこうした講義は初めてのことのようで、準備したものの半分も話せなかったようであるが、講義するということの難しさも実感したようである。まあ、彼のこと、今回の経験を踏まえ、次回には何らかの講義の仕方の工夫をしてくるものと思う。

私は私で、彼は彼で、更に学生は学生で、お互いに益のある一コマであった。正に、「教育活動とは、向上しようとする生命の、お互いに輔け合う関係」を地でいった一時であった。

（2002年12月13日 記）